月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１３４号　　２０２０(令和２)年５月19日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

定時制第４回生関西修学旅行（京都・平安神宮で）
（定４回桜井光孝蔵）

戦中・戦後の学校生活　～学びと修行の日々～

定４回桜井光孝氏は現在、土浦市中央で尾張屋仏具店を営んでおられます。2020年２月21日にご自宅で、高21回松井泰寿が、土浦国民学校・土浦小学校・土浦中学校・土浦一高定時制での学びの日々や、東京・埼玉での修行時代から仏具店への転向までのお話を伺いました。

文中の【　】内は筆者による注記です。

桜井家

私の父は桜井亀四郎、母はまち、兄弟は６人でした。私は上から４番目の次男として1935（昭和10）年７月15日、本町【現中央２丁目】に生まれましたが、本家を継いだ母方の叔父・桜井徳次郎、トメ夫婦に子どもが無かったので、叔父からの強い希望により、物心が付く前に養子になりました。戦後まもなく、亀四郎一家は仕事の関係で九州小倉に移りましたので、私独りが兄弟姉妹と離れて土浦で暮らすことになりました。

父徳次郎は、家具職人で敷島町【現桜町１丁目】に店舗兼住宅を構え、桐箪笥などの家具の製造・販売をしていました。店は土浦駅に近く、海軍さん相手の二業【料理屋と芸者置屋との２種の営業】地である栄町にも近かったので、航空隊の兵隊さんの私服を何人分も預かっていました。彼らは休日に航空隊から外出して来ると、私の家で私服に着替え、栄町に繰り出していました。海軍では、街中でも上官に会えば敬礼を欠かせなかったので、それが煩わしいこともあったのでしょう。母トメは、そうした兵隊さんや予科練生の面倒をよく見ていました。その予科練生が卒業し、飛行練習生として各地の練習航空隊へ向かう時には、必ず土浦駅へ見送りに行っていました。貴重品であった白米のおにぎりを風呂敷に包んで、列車の窓越しに渡していました。そのうち風呂敷が無くなり、腰巻きの生地を使っていました。母は子どもができなかったので、彼らが我が子のように愛おしかったのでしょう。

土浦国民学校

土浦幼稚園（注）から、1942（昭和17）年４月、土浦国民学校【現土浦小学校】に入学しました。３年生の1944年の末頃からは空襲警報が頻繁に発令されるようになり、その度に亀城公園に避難させられました。３・４年生が学んでいた西校舎【現土浦第一中学校】の校庭はイモ畑になりました。食糧事情も悪くなり、学校に弁当を持って来られない児童も出てきました。家の商売のお蔭で日銭が入りましたので、弁当は蒸かしたサツマイモ３本でしたが、持って行くことができました。最も大きな１本を弁当を持って来られなかった仲の良い友だちに上げていました。

４年生の1945年８月15日に終戦の玉音放送を聴き、９月１日に登校したら、鬼畜米英はどこへやら、教科書の墨塗をさせられ、これからは民主主義だと教えられました。訳が分からず、先生方は何をやっているんだろうと思いました。

1947年４月からは、新制小中学校が発足し、新制土浦小学校６年生となりましたが、学校生活に別段変わったことはありません。土浦駅前には闇市が並び、小遣いを貰えた時に、駄菓子屋で買うイモ飴が最高のおやつでした

土浦中学校

1948（昭和23）年４月に新制土浦中学校【現土浦第一中学校】に入学したのを機に、家業を手伝うようになりました。下校をすると、私の作業台には、その日の仕事の材料が置いてあります。父とは仕事場では師匠と弟子との関係です。並んで仕事をしていますが、失敗をすると竹の三尺物差しでピシリと叩かれます。父も仕事をしているので私の手元を見てない筈なのですが、雰囲気で分かるようで、失敗の度に叩かれて、叩かれた所がミミズ腫れになりました。仕事をしたくない時には、下校途中に友だちと遊んで遅く帰ったこともありましたが、仕事を辞めたいとは思いませんでした。

高校進学を考えていましたが、受験前に父から「高校には行かずに跡を継いでくれ。」と涙午らに懇願されました。高校に進学させたら、どこかに就職し、跡を継いでもらえないと心配したようです。進学できないとガッカリしていたら、中学校の石川先生が、一高定時制のことを教えてくれ、父を説得してくれました。

土浦一高定時制

1951（昭和26）年４月、土浦一高定時制に入学。７時起床。父と一緒に仕事をして、17時過ぎに家を出ます。自転車は製品の配送に欠かせないから、と通学には使わせてもらえません。仕方無く歩いて通いました。

17時30分からの１時間目が終わると給食の時間ですが、脱脂粉乳のミルクだけでした。お金がある時は校内販売のコッペパンを買って食べましたが、皆いつも空腹を抱えて授業を受けていました。校舎も粗末な建物で、窓ガラスも何箇所かは割れており、天井からは裸電球がぶら下がっていました。停電も屢(しばしば)でした。ですから、先生も生徒も蝋燭を持参して授業に臨みました。停電で真っ暗になると、先生は片手に蝋燭を翳して板書し、生徒は机の上に蝋燭を灯しました。

しかし、学びの喜びは何物にも代えがたい、と誰もが思っていました。私は家ではいつも独りでしたので、学業成績はともかく、友だちと一緒にいるのが楽しくて仕方がありません。ですから、学校は休んだことが無く、小学校・中学校と全て皆勤賞を貰い、父はそれを喜んでくれました。一高でも欠席はゼロでしたが、卒業時に担任の稲吉一雄先生から「桜井、お前は欠課が多いから、皆勤賞は貰えない。」と言われました。1954年２月から日本プロレスの興業が始まり、テレビ放映も開始され、そのテレビ中継がある日には学校を抜け出して、土浦駅前の街頭テレビを視に行ってしまいました。駅前は黒山の人だかりで身動きができないくらいです。力道山とシャープ兄弟との試合で、群衆は小さなテレビ画面に釘付け、必死に声援を送り、駅前は興奮の坩堝と化していました。放映終了後、学校に戻り、先生には「配達で遅れました。」と誤魔化していたのです。自業自得で仕方が無いと思いましたが、父はガッカリしたようです。

放課後の部活動は、唯一公式戦に参加できるバスケットボール部を選びました。物の無い時代で、バスケットシューズも個人では買えずに部で工面していました。レギュラー分を揃えるのがやっとでしたので、皆がレギュラーになろうと必死でした。雨天体操場や講堂で練習をしていましたが、誰もが仕事を持っているので、全員が揃って練習できることはありません。試合当日に急に仕事が入って、来られなくなるメンバーがいて、常にベストの状態ではありませんでしたが、全日制のチームとも互角に渡り合い、県内でも上位チームと目されていました。ある大会で本校の全日制チームと決勝戦で当たったこともありました。とにかく、思う存分スポーツを楽しめるのが嬉しくて仕方がありませんでした。

友人もたくさんできました。中でも岩﨑實君とは今でも親しくしています。彼は、栃木県の農業高校を卒業して自衛隊に入り、当時は阿見町の自衛隊武器学校に勤務していました。普通科の勉強もしたいと定時制に来ていたのです。勤務を終え、阿見から土浦駅までバスで来る彼と待ち合わせて一緒に登校し、下校も一緒でした。母は戦前の兵隊さん同様、自衛隊の人たちの面倒もよく見ていました。いつも2～3人の隊員さんが家に来ていました。田宿町【現大手町】に下宿していた岩﨑君もよく家を訪れて、一緒に食事をしました。自衛隊の給料日には、2人で祇園町【現川口町】仲見世の甘味処菊屋で、羊羹や大福を腹いっぱい食べました。今では考えられませんが、羊羹1本に大福10個をペロリと食べてしまうのですから、まだ食糧事情が改善せず、よっぽど甘い物に飢えていたのでしょう。

定2回生から始まった関西への修学旅行は、本当に楽しい思い出です。旅費を工面できずに参加を断念した仲間も居たのですが、私は4年生の頃には1人前の稼ぎがあったので行くことができました。京都でのガイドさんが大変な京美人、全国バスガイドコンテストで3位になった人です。家に来ていた自衛隊員を通じて購入したアサヒペンタックスを持っていたので、皆を撮りましたが、私は清水寺・金閣寺・銀閣寺など、どこへ行っても、ガイドさんとのツーショットを撮ってもらおう、と側を離れませんでした。銀閣寺での写真を見る度に、級友の羨ましそうな顔が目に浮かびます。家にあった落語全集を小学生の頃から読み、覚えていたので、生来の喋りに磨きが掛かり、人が集まると「一席やれ！」と言われるほどでした。とにかく側に居たくて、ガイドさんにもその調子で話し掛けていました。今はどうしているか、できることならもう1度会いたいと思っています。

京美人ガイドさんとのツーショット（右）
京都・銀閣寺で（下）
（定４回桜井光孝蔵）

木工修行

卒業後、父と一緒に仕事をしていましたが、もう桐箪笥の時代ではないと考え、22歳の時に上京しました。最初は尾久の家具製作所で働き、次いで王子の会社に移りました。そこの社長は職人を大事にする人で、10人ほどの職人全員が家族と一緒に食事をし、風呂は職人から入り、社長が最後に火の始末をして上がっていました。木桶の風呂には上がり湯のための区切りが付けられていましたから、そこにいつも一升瓶が入れられ、燗がされていました。私は酒を呑みませんが、酒好きな職人たちは、風呂上がりに茶碗で一杯やって上機嫌になっていました。この社長からは、職人、延いては他人を大事にすることを教えていただきました。

その後、戸田の松永木工で修行に励みました。中学校時代から父に仕込まれた箪笥造りの技術や、尾久・王子で身に付けた技もあって、大きな仕事を任されました。大型客船の厨房の組は、何人ものコックが、同時に調理に掛かれる大きさに仕上げなければなりません。樺材を厚さ6寸（約20㎝）ほどの板に挽き、それを板接ぎ（たつぎ）の技法で継ぎ合わせ、畳2畳ほどの大きさにします。ここまでは箪笥造りの経験があり、さほど難しくはありませんが、削りは初めての経験でした。組には1000分の1㎜でも凹凸があれば、包丁の切れ味は違ってきます。鉋とその研ぎ方の勉強から始めて削りの練習を繰り返し、ようやく満足のいく組を納品することができました。あの組のお蔭で鉋の使い方が分かったと思います。当時の職人たちは皆、東北や信州からやって来た人たちでした。腕のいい職人の仕事ぶりを見て、その技術を盗みました。道具の使い方・仕事の段取り、全てを視て覚えました。

当時はまだ珍しかったバイクに乗っていたので、社長から集金を頼まれ、浦和や川口などへ何回か行きました。支払いは小切手。それも15時を過ぎないと渡してくれません。小切手の決済を延ばして、1日分でも利鞘を稼ぎたいのです。翌日にまた銀行に行くのが面倒なので、銀行の守衛に頼み込んで裏口から入り、窓口の行員にもお願いして小切手を決済してもらい、現金を社長に渡しました。社長はびっくりし感心していましたが、後日、集金先の社長に「あの若造はなんだ！」と怒られたそうです。休みの日には、近所の人から用事を頼まれればバイクで手伝っていました。理容室の小母さんからは、「娘の婿養子にならないか？」と言われましたが、養子の身なので養子にはなれない、と断りました。

独立

27歳の10月に家に戻り、再び父と仕事をするようになりました。父が抱えていた借金を返済し、敷島町の店は借地だったので更地にして返し、中村西根に住宅兼工場を建てました。僅か10坪の工場から始まり、今に至りましたが、全て周囲の人々のお蔭だと感謝しています。

最初は一般木工の仕事をしました。足掛け6年の修行で、一通りの技能は身に付けてきた筈なので、あとはその応用です。しかし、大規模大量生産の時代に入り、個人経営の工場が生き残るには特化しなくては、と思いました。我が家では祖父が購入した仏壇に毎日、お水とご飯とをお供えし、お線香を上げてから朝ご飯を頂いていました。私も小さい頃からそうしてきました。そして、自分でもこんな立派な仏壇を造りたい、と幼心に思っていたので、仏壇や神棚などの宗教用具を手掛けていくことにしました。しかし、仏壇や神棚を造るのは初めての経験で、何から何まで全て難しく苦労しました。誰も教えてくれる人はいませんので、自分で覚えるしかありません。江戸指物（さしもの）の勉強から始め、新潟や金沢など全国各地の展示会に車の中で寝泊まりし乍ら足を運び、実物を見て回って学びました。

仏壇や神棚は、人々が心を込めて日夜手を合わせ、何世代にも亙って長く使うものですので、良い製品・納得していただける物を造らなくては、と常に心掛けています。また、材料は樹齢何百年という木ですので、その命を無駄にしてはいけない、と肝に銘じています。

（注）**土浦幼稚園**：1885（明治18）年に開園された茨城県最古の幼稚園。大正から昭和初期には、マリア・モンテッソーリの教具を購入し使用させるなど、先進的な幼児教育を行った。

（高21回　松井泰寿）